

感想——映画『どうすればよかつたか?』

針乃夢史郎

学生時代に姉が統合失調症を発症するが、両親はその事実を受け入れない。適切な治療を受けさせないまま、延々家に留め置いてしまう。その現実に憤りを覚え続けた弟は、やがて映像作家のたまごとなり、帰省のたびに実家の三人に向けてカメラを回しはじめる……。

『どうすればよかつたか?』は、二〇二四年十二月に公開された日本のドキュメンタリー映画です。監督の藤野知明が、病気になつた姉とその両親、それを見つめる自分自身の姿を何年にも渡つて撮り続けた、文字通り一生モノの作品だと思います。

統合失調症は若いときに発症することの多い精神疾患で、幻覚や妄想、感情の鈍化や意思疎通の困難など、さまざまな症状があるそうです。原因ははつきり分かっていませんが、早期に治療を始めることが大切で、現在では医療の進歩により回復可能な病気とされています。

もつとも今作では、撮影者たる弟＝監督がまだ子供だったこともあり、お姉さんの病状が悪化していく最初の九年間ほどは撮れていない。おそらく彼自身が「家」という環境から抜け出すために地元の北海道を離れて神奈川に就職。その後お金を貯めて三十一歳で映画学校に入学。撮影＆インタビューという、自身の現実を相対化す

るための「方法」を手にしたのち、実家へ帰るたびにカメラを回すようになる。こうした作品全体の枠組みと視座を、冒頭でちゃんと語っているところがいいです。記録としての不完全さも含めてね。

一家四人での週末の行楽シーンから始まる本編は、あたかもごくありふれたファミリー・ムービーらしい雰囲気をなぞつていてるかのようです。しかしその中でも姉ひとりの様子があきらかに「ふつう」でなく。そうして両親へのインタビューや一家「団欒」のシーンなどが積み重なつていいくにつれ、撮影者たる弟が危惧している事態がどんどん露わになっていきます。彼は撮影の傍ら両親に対し、過去のたつた一度の診断を過信するのではなく、もう一度姉を医者に連れていくよう再三説得します。しかしそのほとんどは、成果のないディスコミュニケーションのままに終わってしまいます。

もともと研究医であつたご両親は、最初に医者に連れていくつて以降はセカンドオピニオンを仰がず、「変わつてしまつた姉をそのまま自宅に放置してしまう。やがては玄関に鎖を巻きつけ、実質軟禁状態にまで置きながら……。病気になつてしまつた娘を認めたくないからなのか、世間の目に晒したくないからなのか。まだこの病気が「精神分裂病」と呼ばれていた時代の話であるがゆえ、という部分も大きいかもしれません。

ともあれ、医科の学生であつた娘が国家試験に挑戦す

感想——映画『どうすればよかったです？』

ることは依然求める一方で、自分で自分をどうにもでき
ない状況に追い込まれた彼女がハマっている星占いは二
べもなく否定する。ご両親は互いに互いの責任を庇い合
い、そのせいでお姉さんが犠牲になつてているように見え
なくもない。そうして序盤で弟が姉に対して投げかける、
「お父さんお母さんのこと、恨むばつかじやないよね？」
という言葉には、むしろ弟自身の思いが強くじみ出で
いるよう思える……。

しかし、事態が一向に進まないあいだも画面内ではま
たたく間に歳月が過ぎていき、役者ではない彼ら一家に
は現実の「時間」が容赦なく襲いかかっていくこととな
ります。そして弟のカメラは、その過程をも激しい演出
無しに冷静に捉えていきます。

◆◆◆

映像を記録し構成し発表するという行為には、さまざ
まな解釈に向けて開かれている現実世界を、観察者の価
値観でもつて意味づけ規定する、という側面があります。
それはあえて強い言葉で言うなら、（文学と同じく）表現
行為という特権性に基づく一種の攻撃性や暴力性と捉え
ることも可能だと自分は思います。しかしそれを本作で
は、他ならぬ作り手自身の肉親——特にご両親の責任、
という部分に向けているところが何とも衝撃的でした。

この映画のキャッチコピーは「言いたくない 家族の
こと」。どれほど円満な関係であつてもそうそう他人に
は見せたくないであろう自分自身の「家」のありさまを、
家族かつ撮影者という立場から切り取つていく手つきの
背後には、どれほどの葛藤があつたのだろうと思わされ
ました。それに上に書いたような映像の特権性というの
は、裏を返せば「すでに起きてしまった出来事」の記録
に過ぎないということでもあります。どれほど現実の出
来事を写し撮つても、それ自体を巻き戻したり改変した
りすることはどのみちできないという。そういうことも
考えさせられる作品でした。

個人的には特に家庭という権力関係においてもつと
も弱くて、状況への責任もつとも薄かつた当事者のひ
とりが、この作品を撮り語つてているという、その微妙な
不安定さこそが一番の見どころの映画かも、と思つたり
しました。撮るという行為が現実に対する精一杯の抵抗
であつたと同時に、そこには語り手である弟II監督自身
の「弱さ」と、それに対する忸怩たる思いが垣間見える
氣もする。そうした単一の価値観に還元できないナマの
人間の複雑さのような部分が、フィクションではなくて
ドキュメンタリー映画であることのある意味最大の醍醐
味かもしれないなど。

この映画への反応をネットで検索すると、観た人の感
想がほんとうに千差万別なところも良い部分ではないか

と思います。実際の出来事を撮っているから解釈の余地がないかと言うとむしろ逆。余計な枝葉を取つて整えられた作り物語にはおさまらない部分がたくさんあるからこそ、逆に無数の切り口が生じていて、いろんな想いや体験を投影して観られるし、自分の家族を省みざるを得ないところもあるし。

（公開・二〇一四年／監督・藤野知明／制作・浅野由美子
／製作・動画工房ぞうしま／配給・東風）